

## 火をつけたら消す

〜小村寿太郎の故郷 飢肥〜

小道 周帆

三月一日から日本経済新聞の朝刊に『陥穽Ⅱ陸奥宗光の青春Ⅱ』（辻原 登著）の連載小説が始まった。サブタイトルから類推すると若き日の陸奥宗光、即ち尊王攘夷運動に加わり、坂本竜馬との出会いや勝海舟の設立した神戸の海軍操練所での学び、さらに竜馬の亀山社中、海援隊のメンバーとして活躍した時期を描くのもかもしれない。

陸奥宗光の業績といえば、第二次伊藤内閣の外務大臣として活躍し、日米和親条約締結から四十年後の一八九四年（明治二十七年）七月十六日に日英通商航海条約を締結し、治外法権の撤廃という不平等条約の一部改正を成し遂げたことだろう。

陸奥宗光の日英通商航海条約の締結が一部改正とならざるを得なかったのは、一八九四年（明治二十七年）八月一日に日清戦争の宣戦を前にイギリスの支持を得る必要から、条約交渉では譲歩を強いられた。即ち、法権についてはほぼ狙い通りとなったものの、税権に関しては不十分で、関税の扱いでは供与や猶予等を設け譲歩する形となった。

イギリスとの不平等条約の改正を契機に、アメリカ、イタリア、ロシア、ドイツ、オランダ等の国々ともイギリスと同内容での通商条約の一部改正が行われた。これには日清戦争の勝利を背景に陸奥宗光の巧みな外交交渉の結果であると共に、各国が日清戦争に勝利した日本を対等の国として扱ったともいえる。

黒田はこの連載小説をきっかけに、学生時代に『外交史』の授業で学んだ不平等条約の改正のことと、それに尽力した陸奥宗光と小村寿太郎のことを思い出した。確かノートが残っているはずだと、書庫を探してみると、茶色く色焼けした当時の講義ノートが見つかり、懐かしい思いで開けてみた。

陸奥宗光が成し得なかった不平等条約の残された関税の改正は、陸奥の引き立てにより外務次官そして外務大臣になった小村寿太郎によって、明治四十四年に列国との新たな通商航海条約の締結を以って、ようやく関税自主権を獲得できた。

その背景も先の日清戦争後の条約改正と同様に日露戦争の勃発とアメリカのルーズベルト大統領による仲介で講和条約の締結（明治三十八年九月五日）Ⅱ

ポーツマス条約が大きく影響している。この講和特命全権大使が小村寿太郎である。

日本は完全勝利したとの国民感情があつたが、その内情は戦費のための増税により国民の耐乏生活が限界近くなつたことや、死傷者が二十万人に達しており、国力の消耗が想像以上であり、戦争の継続は難しい状況にあつた。一方、ロシアは、ロシア第一革命が起こり、ロシア国内は混乱状態になり、戦争の継続が難しくなつていた。アメリカの仲介による講和はやむを得ないと思つていた。

交渉にあつて、ロシアは緒戦では日本に負けていたが、国力、兵力共に日本より上回つており、持久戦では必ず勝利すると思つていたため、強硬な姿勢を崩さず、交渉は難航した。

その結果、

①ロシアは満洲および朝鮮からは撤兵

②樺太の南部を日本に割譲する

③日本は満洲南部の鉄道及び領地の租借権、大韓帝国に対する排他的指導権を獲得

④ロシアは戦争賠償金には一切応じない  
という条件で交渉は成立した。日本としては辛うじて勝者としての体面を勝ち取つた。

ただ軍事費として投じてきた国家予算四年分にあたる二十億円を埋め合わせるための戦争賠償金を獲得することができなかった。日清戦争では賠償金を得ていただけにポーツマス条約締結直後には、日本が勝利したと信じ込まされた国民は、賠償金も得られない弱腰交渉との批判が出て、日比谷焼打事件などの暴動が起こつた。外相官邸も襲われたが、小村寿太郎は「政治の難局に、我が身を忘れ、国のために将来を思い、目的通り責任を果たした」と語つた。

なお、黒田の外交史ノートには赤枠で囲つて次のようなことが書かれていた。  
アメリカの仲介に動いた際のエピソードと題して、小村寿太郎はルーズベルト大統領に

「日露講和の斡旋に乗り出してもらいたい。ただし、それを日本から頼まれたとは、ロシア側に言わないように」

と懇願した。即ち「アメリカは頼まれなくてもこの仲介を買つて出た」としてもらいたいとの意であつた。

さらに小村寿太郎の言葉として、

「火をつけたら消すことを知らんのか。それを忘れてるのは馬鹿だ！」  
いわば日露戦争は日本が火を付けたから消すのは日本であると考えており、火を消すためにルーズベルトを上手く使おうと考えていたのである。

そんなノートを見ながら、黒田は、現在のロシアとウクライナの戦いも、プーチン大統領が火をつけたのだから、秘かに小村寿太郎のように、陰で中国の周近平国家主席に仲介の働きかけをすべきだし、しているかもしれない。

いや、国力で劣るのはウクライナであり、これ以上の国土の荒廃は避けたい、国民の命を守りたいとの思いから、ゼレンスキー大統領が周近平国家主席に働きかけをしているかも知れない。

中国は世界でのイニシアティブを獲得する狙いで、仲介にあたるかもしれない。黒田は小村寿太郎の動きを記したノートから漠然とではあるがそんなことを考えた。いずれにせよ早く火を消してもらいたい。

薩長出身者が登用されている明治政府で、薩摩藩の隣の僅か五万一千石の飢肥藩出身の小村寿太郎が外務大臣にまでなったのは不思議な思いがした。

更にいえば、薩摩藩が明治維新の中心になったのに対し、飢肥藩の藩主伊東氏は十四代まで続いているが、誰ひとり幕府の要職を務めた事もなく、幕末でも目立った活躍はしていない。

ただ、その分、藩主は権力志向というより、領地の発展と領民の幸福のための治世を行なったといえる。中でも領民への教育に力を注いでいた。藩校『振徳堂』では藩士の子弟は必ず入校しなければならない規定で、徒步格以下は任意で入校できた。また藩士以外でも希望するものは入学を許された。その教授に、その後は儒学者として江戸時代に活躍した安井息軒がいた。小村寿太郎も安井息軒の弟子に教えを受けた。また、町人や農民には主に習字・算術を一般の家塾で学ぶ仕組みを作っていた。

黒田にとって不思議な街、飢肥（おび）に行ってみたくなくなった。小村寿太郎や『振徳堂』だけでなく、九州の「小京都」とされており、国の重要伝統的建造物群保存地区として、侍屋敷をはじめ歴史的風致を残している街でもあるようだ。

まずは飢肥に行ってみよう！幸い定年退職後の自由な身であり、すぐさま飛行機を予約し、宮崎空港に着いた。なるほどプロ野球のキャンプ場とされる暖

かな空気を感じた。まずは飢肥藩主伊東家と関係の深い鵜戸神宮をお参りしよう。空港からバスで向かい、一時間ほどで到着した。本殿にお参りするのに向かかってドンドン下っていく。「下り宮」というらしい。そういえば群馬県富岡市にある貫前神社も下っていたのを思い出したが、ここは海を見ながらの下り参道でとてもいい感じだ。本殿は海に面した洞窟の中にあるのに驚いた。丁寧にお参りし、振り返ると海に向かって何かを投げている人がいた。海の中にある亀石の枡形の穴に「運玉」を投げているらしい。入れば願いが叶うとされているようだ。早速挑戦！男は左手で投げる。何とか一つが入った！こりや明日の飢肥訪問にいいことがあるぞと嬉しくなった。

鵜戸神宮から飢肥まではバスが出ている。海岸線を気持ちよく走り、油津駅経由で飢肥まで。乗客が少なく青い海を存分に味わえた。乗ること三十分、大半の乗客は油津で降りた。それもそのはず、黒田が旅館・ホテルを事前に調べたところ、油津にはホテルが多くあるのに、飢肥には二軒しかなかった。そのうちの二軒に「九州の小京都『飢肥』」にふさわしい、昔ながらの素朴な旅館です」との案内に魅かれ、今日はその『百合旅館』に泊まることにした。

夕刻、街の魅力を知るため飢肥の居酒屋に出掛けた。最初に目にしたのが『居酒屋おしどり』。その名の通り夫婦連れのお馴染みさんが多い感じだ。それだけによそ者の黒田が目立つようで、すぐに話し掛けられた。

「東京からですか」

「飢肥はいい街でしょう」

「飢肥城は行きましたか」

黒田も打ち解けて質問してみた。

「飢肥ってなかなか読みにくい字ですが、その語源は？」

「食」と「天」を組み合わせた「飢」は、食べ飽きるという意味があります。その他にも「有り余るほどのごちそう」という意味もあります。要するに恵まれた豊かな所から飢肥という名が生まれたのではないのでしょうか」

「飢肥城がありながら日南市ですね。飢肥市にできなかったのは？」

「以前は南那珂郡飢肥町だったのですが、隣接町村が合併しようということになったのです。歴史のある飢肥町と漁業や海運業の盛んな港町油津町とで主導権争いがあり、新市の名付けにも揉めましてね。両市に関係のない名前にしようとして日南市が誕生した訳です」

「昔のことですが、廃藩置県により一時は飢肥県とされたこともあるのですよ。

その後は合併により美々津県そして都城県そして現在の宮崎県となったようです。飫肥県はともかく、飫肥市にして欲しかったと飫肥町の人は思っているでしょうが、今さら言っても始まりませんので、日南市飫肥で売り込みたいですね」

「九州の小京都ですし、昔の街並みの残っている重要伝統的建造物群保存地区ですからね」

店長が

「お客さん、お隣の奥さんはテレビ番組に出た飫肥では有名人なんですよ。ねえご主人」

「そうなんです。ご存じですかNHKの『鶴瓶の家族に乾杯』という番組」

「ええ知っています」

「うちの奴、それに出たんですよ。街を歩いていたら、鶴瓶師匠に声を掛けられ、飫肥を案内する羽目になったんです」

「わたしビックリしましたわ。ぶっつけ本番って本当でしたよ。とにかくお喋りをしながら飫肥城を案内しました」

鶴瓶師匠はさすがだ。物おじしない感じで、明るい人を上手く見つけるんだなど納得。

「どうですかお客さん、黒田さんだったね。車での旅じゃないのでしょうか。小さな街ですが歩いて回るのはそれなりに大変ですよ。私は明日仕事がありますので、家内に車で飫肥を案内させましょうか」

「ええ、いいのですか」

「大丈夫ですよ。私の方は明日何も用事ありませんので案内できますよ」

「それはいい。鶴瓶ならぬ亀瓶ですな」と店長。

そんな訳で、明日九時半に飫肥城の駐車場事務所で長友さんの奥さんと待ち合わせるようになった。黒田は旅館帰って思うに、長友さんは酔った勢いで言ったようでもあり、亀瓶になれるかはどうか半信半疑であった。とはいえ、鶴戸神宮での「運玉」の成功もあり、ツキがあるに違いないと信じて眠りに入った。

翌朝は早い目覚めで、九時前には本町通り（国道222号線）をブラブラ歩きながら飫肥城駐車場に向かった。この通りは街並みの景観造りに努力されているようで、まずは電線・電柱がなく地下埋設されているようだ。家や商店は全て日本風で、ケバケバしい色合いはなく、城下町らしい落ち着いた佇まいで、タイムスリップした感じで歩いた。途中で出会う小学生がみんな「おはようこ

ざいます」と元気に挨拶してくれる。礼儀正しい小学生に感心した。

右折して大手門通りに入ると『小村寿太郎生誕碑』があった。ここに小村寿太郎の家があったのかと案内板を見ると、小村家は下級藩士であり商家出身の母親の関係で商人町のここに住んでいたようだ。大手門に向かって歩くとお堀に鯉が泳いでいるのを見ながら、駐車場に到着。さて長友夫人は来ているのかなと見渡すと、居た、居た、やってきてくれた。これで亀瓶になれる。

「おはようございます。お言葉に甘えまして恐縮です」

「おはようございます。案内役を務めさせていただきます。じゃ、まずは飢肥城から行きましょう」

城内にある『歴史資料館』を訪ねると、

「あら、長友さん。今日はどなたを案内しているの？」  
と、窓口の方に声を掛けられる。店長が言った通りすっかり有名人なのだ。

「今日は時代劇の脇役で有名な黒田亀瓶さんよ。知らない？ホホホ私も昨日知ったのよ」

長友さんは冗談を言いながら資料館を案内してくれる。外に出ると、飢肥城址にはあちらこちらにお城の石垣が残っている。さらに行くくと立派な飢肥杉に迎えられて旧本丸跡に向かう。見事な石垣と百年を超える飢肥杉に圧倒される。北の丸に向かう途中で学校のグラウンドが見えた。

「飢肥城址に学校があるのですか」

「ええ、飢肥小学校です。実は私も若い頃ここで教師をしておりました」

「先生だったのですか。今朝、通学途中の小学生に元気な挨拶を貰い、感激したのですが、長友先生も指導されていたのですね」

「いえいえ、学校で指導した訳ではありません。小学生ながらお客さんをお迎えしたいという気持ちと、藩校『振徳堂』の流れからくる誇りなのかもしれないですね」

「それにしても城跡に小学校があるのは凄いことですね。金沢城址には金沢大校があり、城内キャンパスと呼んでいるようですが、飢肥城址には飢肥小学校がまるまる入っているのですから、驚きです」

「確か飢肥小学校のホームページには明治二十三年の小学校令により高等小学校が生まれ、その敷地を旧城址の山里の地を旧藩主伊東家より無償貸付を受けたと書かれています」

「藩校『振徳堂』と同様に旧藩主は教育、人づくりに熱心だったのですね。小村寿太郎もお陰でこの地で生まれ学べたのですね」

歩きながら飢肥を訪ねるキツカケとなった小村寿太郎の話をした。そして町中にあつた小村寿太郎の生誕地碑を見てきたと伝えた。

「実は小村家は下級武士で貧乏だったので、明治六年に父・小村寛が総代人となり『飢肥商社』を設立して一儲けをしようとしたのです。武士の商いは出来ようもなく、その後破産し小村家には借金が残り、一部は寿太郎も借金で肩代わりをしていたと言われています」

「いろんなことがあつたのですね」

「次はその小村寿太郎のことが解る『小村記念館』が大手門の傍にありますから案内します」

『小村記念館』には小村寿太郎の生い立ちから亡くなるまでの業績等を紹介する展示場があり、黒田はそれらを順に見た。特に年表に興味を持った。

明治二年に『振徳堂』を卒業して、長崎・東京に留学しており、その後は国費でハーバード大学法学部に留学し、その留学中に故郷とも関係のあつた『西南の役』が起こっている。帰国後は司法省の判事となるが、その語学力を買われて外務省翻訳局に勤務している。順調に翻訳局長に就いたときに『大津事件』が起こり、ロシアの考えを見通し、対策を練つたようだ。続いて、列強と清国との関係が複雑になつていた明治二十六年、小村寿太郎三十八歳で、清国代理公使として北京に赴任した。翌年『日清戦争』勃発。いやはや目まぐるしい時代の中で小村寿太郎は外国との関係を身近に感じ活躍していた様子が解る。

「黒田さん、こちらに興味深いものがありますよ」

長友さんに案内されたのは、日露講和条約（ポーツマス条約）調印時の会場のテーブルが復元されているコーナーだった。写真も展示されていたが、ルーズベルト大統領やロシアの全権大使ウイッテと並んだ写真では頭一つ低い小柄な小村寿太郎が写っている。150センチにも満たなかつたとか。

「こんな小柄でありながら、堂々と交渉したのですね」

「本当ですね。寿太郎は語学に秀でていましたから、自信と度胸があつたのですね。頼もしい。ここに小学生を引率してきたときにそんな話をしていましたわ」

記念館の前の道に行く。

「ここは『横馬場通り』と言いますが、街の人は武家屋敷通りと呼んでいます。お城が一番近いところで、上級家臣の屋敷が配置されています。家老職を務めた伊東伝左衛門の家です」

「見事な石垣ですね」

「道幅も当時のままで、石垣、生垣、門もそのまま保存されています」  
家の門から今にもご家老が家臣と共に出てくるようだった。

「ここから左折して少し行くと、黒田さんのお目当ての藩校『振徳堂』があります」

石垣に囲まれた広い敷地内に、長屋門と主屋が保存されている。小村寿太郎の銅像もある。黒田は思わず近づき、深く頭を下げた。

「ここは飢肥城復元事業の第一号として市民の募金により修築、復元されました。右側が素読の間で、ここで毎日、四書五経・文選などの素読を教えていたのです」

「広い敷地ですね」

「残されている長屋門と主屋の他に講堂、寮、書庫、撃劍場、槍場などの武芸所などを構えていました。これが建物配置図です」

「どれくらいの生徒がいたのですか？」

「記録によれば、通学生二百名、寮生百五十名、合わせて三百五十人程です」

「小村寿太郎はいつまでここで学んでいたのですか？」

「万延二年（一八六一）六歳の時から明治二年（一八六九年）十四歳で卒業しています。もちろん首席だったようです」

そんな話をしている途中に、長友さんの携帯電話が鳴った。

「予約できたの、よかった。ありがとう」

「主人からです。そろそろお昼の時間ですから、いいお店の予約を取ってくれたんです。近くですから行きましょう」

先ほど通った武家屋敷通りにある『服部亭』に案内された。ここは料理屋さんとは思えない門構えや立派な塀に囲まれている。飢肥藩御用商人で、江戸時代から続く山林王・服部家の約百年の歴史を持つ旧邸宅を改装してお食事処『飢肥 服部亭』にしたとのこと。

「お食事のお薦めは郷土料理を盛り込んだ和食の服部膳ですが…」

「それで結構です。どんな料理か楽しみです」

服部膳が出てきた。メインはちらし寿司で御飯の上にタコ・イカなどの魚介類と椎茸佃煮・錦糸卵がたっぷりのったもので、飢肥寿司というそうです。それにおび天（飢肥天）や厚焼き卵をはじめとする飢肥名物。さらに刺身、焼き物、茶わん蒸し、米ナスの田楽、吸い物等々、飢肥の郷土料理や地元の食材をふんだんに使ったものがズラリと並び、いやあその品数に驚いた。食事後は抹茶とよもぎ饅頭を頂きながら手入れの行き届いた庭を眺め、ゆったりした気分



で過ごした。

併せて『亀瓶の家族に乾杯』という訳で、長友さんのご家族の話聞かせてもらった。

ご主人は電気工事会社をなさっている。息子さんは名古屋の自動車関連会社にお勤めで、来年あたりに結婚する様子だとか。娘さんは横浜に住み大学に通っているそう。安井さんは娘さんが生まれた時に先生を辞めたものの、時々先生の病欠が出た時には乞われて教えに行くこともあるとか。そんな話をして居たら、ドンドン時間が過ぎて行った。長友さんも気になったようで

「それはそうと今晚のお泊りはどちら？」

と聞かれた。あんまり遅くまで案内してもらうのは気が引ける。

「宮崎市内のホテルです。勝手を申しますが三時ごろ列車に乗ろうと思っています」

「じゃあ、一時間半ほどありますね。歩いてばかりでしたので、午後は少し離れた場所を車で案内しますね」

「ありがとうございます」

長友さんが化粧室に行っている間に勘定を済ませておいた。

長友さんの運転で出発。酒谷川を渡って小高い丘に着いた。歴史展望台とある。飢肥城下の眺めが素晴らしい高台だ。酒谷川が蛇行している様子もよく判り、飢肥城を守る堀の役割をしている。歴史展望台と名付けられているのは、文明年間（1484年）の飢肥の伊東家と薩摩の島津家との戦いをした古戦場だからだそう。

「最後の案内は、黒田さんが喜ぶところをお連れします。少し歩いてください」

山裾に残された池は落ち葉や土砂が堆積している五百禊（いおし）神社の境内に入った。

「あれ？裏に墓地がある」

「神社に墓地って変ですよ。ここは飢肥藩主・伊東家の菩提寺『報恩寺』があった場所で、明治の廃仏毀釈により廃寺となり、その跡地に神社が建立されたのです。周りは少し荒れています。が広い庭園跡です」

「・・・」

「もうお解りでしょう。この墓地は藩主歴代の伊東家の墓があるのですが、そう、小村寿太郎のお墓もあるのです」

「ありがとうございます。お参りさせていただきます」

黒田は暫し頭を下げ、日露戦争の終結のタイミングを見事に成し遂げた小村寿太郎に感謝の気持ちを捧げた。

満足だ。小村寿太郎関係の由緒ある場所は回り終えた。長友さんのお陰だ。この後は飢肥駅まで送り届けてもらった。

「ありがとうございます。記念になる一日を過ごすことが出来ました。長友さんご夫妻に感謝、感謝です」

飢肥からの列車に乗って、小村寿太郎のことを思い起こした。日露戦争は緒戦で有利であった日本を、その外交手腕で、アメリカのルーズベルト大統領を担ぎ出し、ポーツマス条約を締結し、講和を図った。

歴史に、もしはないけれど、一部の軍部の勢いそのまま戦い続けておれば、兵力、経済力で劣る日本はロシアにのみ込まれただろう。

改めて『火をつけたら消す』の小村寿太郎の戦争終結への考えに心から感謝しなければならぬ。

第二次世界大戦に小村寿太郎がおれば、広島、長崎の原爆はなかったと思う。真珠湾で先に火をつけた日本はその後、消す方策を考えておれば違った形になっただろう。

ロシア、ウクライナ双方に小村寿太郎の姿勢を見習って欲しいと念ずるほかはない。

完 (2023.3.15著)

(8423字)

#### 《参考文献》

- ・『小村寿太郎とポーツマス』 金山宣夫 1984年 P H P 研究所
- ・『小村寿太郎 小伝』 奉賛会編集委員 1992年 小村寿太郎侯奉賛会